

人口減少・地域再編の最前線から問う 持続可能性とは

ゲスト講師 谷内 博史 (前・のと島クランク研究所 アドバイザー *2018年7月から金沢市市民活動サポートセンター チーフコーディネーター)

目次

- | | |
|--------------------|--------------------------------|
| 1. はじめに | 4. まあそい能登島 |
| 2. 能登島地域づくり協議会について | 5. ワーク・ライフ・バランスと
コミュニティワーカー |
| 3. 地域づくり協議会の活動 | |

※このレクチャー・ドキュメントは、同志社大学大学院総合政策科学研究科とCEL（大阪ガス エネルギー・文化研究所）の教育研究協力協定に基づいて開設した「コミュニティ・デザイン論研究」講座から、2017年11月13日に同志社大学で行われた授業の一部をまとめたものです。

1. はじめに

私は大学を出てから2～3年おきに民間のまちづくり会社、NPO、行政職員などいろいろなことを経験して、この7月から家族と暮らす能登島の地域の課題を解決しながらビジネス化するプロジェクトに関わっている。



能登島は、昔はフェリーでしか渡れない島だったが、2カ所で橋が開通して、20年ほど前には無料化もされた。すぐそばには和倉温泉のエリアがあり、観光客で随分賑わっている。周囲は約72km、人口は約2800人で、世帯数は少し前まで1000世帯を超えていたが、今は990数世帯になっている。この島はかつては能登島町という一つの行政単位としての島だったが、15年ほど前に、能登島町、中島町、田鶴浜町、七尾市の1市3町が合併し、新七尾市となった。

今日は主に旧能登島町のエリアで行っている活動などについてお話しし、コミュニティづくりを考えるきっかけになればと思う。

2. 能登島地域づくり協議会について

私は今、能登島地域づくり協議会という本体の下で仕事をしている。これはいわゆる、合併した地域の自治組織。今、各地でこういった取り組みが進んでいて、合併前の単位で協議会のようなものを作って、そこに地域自治区のような形で一定の権限を持たせて活動している自治体もある。

七尾市の場合は、地域づくり協議会に明確な条例上での位置付けはない。が、合併を機に、能登島町の役場がなくなった。とはいえ、合併前から社会福祉協議会、町内会、青年団、地区女性会、PTAなど、皆さんが地域でさまざまな活動を行っていたので、これをまとめて協議会の形にして、事務局を置いて、役所とのやりとりなどを担おうということになった。この地域づくり協議会では、各種団体が集まり、地域の課題を話し合いながら、地域としての公共的な課題について、自治的に自分たちで解決するということが期待されている。

3. 地域づくり協議会の活動

能登島地域づくり協議会は、平成20年に立ち上げた。この中には幾つか部会があって、例えば観光産業部会では、民宿や観光施設の運営をしている方々、飲食店の方々などが集まってさまざまな観光振興についての対策を講じている。私は産業観光部会の担当をしている。

生活福祉部会もある。少子高齢化や65歳以上の独居世帯の増加などを受けて、支え合い活動、家の中にもりがちな方と一緒に地域の集会所などでみんなお昼ご飯を食べる

など、ボランティアベースで福祉的な活動を行っている。また、能登島の中にはスーパーがないため、買い物をするとなると橋を渡って対岸にある大きなスーパーまで行かなければならない。お年寄りの方で車の免許を返納した方などは買い物にも困るということで、地域の民生委員や手の空いた元気なお年寄りで手伝ったり、病院に連れて行ってあげたりする。能登島は20の集落が分散していて、それぞれ距離もあるので、なるべく歩いて暮らせる範囲の中で、その地域にある施設を活用して、生活のニーズが充足するようなことを、生活福祉部会では実現させようとしている。

教育文化部会では、生涯学習やサークル活動、スポーツのお世話など、公民館的な活動をしている。

環境防災部会は、主に町会の人たちが中心となって活動している。能登島は志賀原発から20km 圏内のEPZのエリアにある。今は稼働していないが、将来、もし原子力災害があったときは、船で逃げろと言われている。お年寄りの方は自分の力では逃げられない。従って、そういう方々をリヤカーに乗せて運ぶ当番をみんなで話し合ったり、連絡網をつくるといった活動も行っている。こういう活動は普段の福祉的な見守り活動と非常に連動しやすく、島全体としてどういうことができるかを、この協議会の中で話し合っている。例えば、病院も診療所が一つあるだけで、ヘリコプターでの緊急搬送を考えて石川県や七尾市とその医療機関が連携してヘリポートの設置をしてほしいと、環境防災部会から要望を出して実現するなどの例がある。このように、地域の中のあらゆる組織が入り、地域の課題を捉えて、その解決に向けて必要な活動をしている。

かつて役場だったところは、耐震基準が足りないということで建物が閉鎖されたので、診療所と医療福祉法人が運営しているデイケアセンター、市民センターの行政コーナー、地区の図書館、公民館を集約させた健康福祉センターの中で、地域づくり協議会と役場の職員が机を並べて一つの施設の中で活動している。

平成28年度は市民センターがなくなって、役所機能がなくなった中で、能登島の情報を集めて掲載する能登島新聞、かつての町の広報のようなものを地域づくり協議会で編集・出版したりしている。また、今まで文化祭や運動会などのイベントは地域でばらばらに行っていたが、過疎地域ということで、小学校の運動会と地区の運動会を一緒にやるようにした。年1回の非常に盛り上がる運動会になった。

公民館行事として毎年やっていた市民文化祭と敬老会、老

人会などのイベント、島の漁師たちが鍋で魚を振る舞う漁港祭りなども、今は同じ日に同じ会場で行っている。そうすることで、地域の人たちが集落を越えて顔を合わせる機会にもなっている。さらに、「今度、あのことを話し合わないか」など、課題発見や課題共有もしやすいということで、こういう行事は馬鹿にならないと、地域づくり協議会の運営に携わっていると思うところ。

最近は農水省の補助も活用しながら、農業と漁業の6次産業化、ツーリズムをやっているということで、地域資源調査を行っている。また、地域の高齢化率や、畑で何の作物を作っているか、それは誰が作っているのか、その人はいつごろまでやれそうなのか、この農地を守るために営農組合を立ち上げないと耕作放棄地だらけになってしまうなどということ、地図上のデータと将来予測を重ねて検証したりしている。

データ集めだけでなく、おばあちゃん、おじいちゃんが農閑期にわら細工や保存食を作ったりしているが、どんどん亡くなっていかれて失われていくので、次の若い人たちに継承するために、作り方を習い、写真や映像で記録して残していくという活動も行ってきた。

コミュニティカフェ「島のいっぴき」

地域内外の方が気軽に立ち寄り、おいしい島の昼ご飯を食べながら交流できる場をつくる活動です。
2年目に入って少しずつ認知度が上がってきました。



まずはできるところから始めようということで立ち上げたのが、コミュニティカフェ「島のいっぴき」という活動。お年寄りの方々を集めて一緒にお昼ご飯を食べたり、お弁当を毎月1回配りに行く形で一人暮らしの家に訪問する活動を30年近く続けている団体が、ご飯処を運営する活動を、閉園した保育園跡で開始した。毎週土曜日だけの運営だが、観光客にも食べに来てもらえるようになった。メニューはあえておばあちゃんたちが作るような伝統料理にしている。島内から募った40～50代のボランティアの方に作ってもらうことで、伝承するという意図がある。「島のいっぴき」は、2017年春から、毎週土曜日に各地域に出張してコミュニティカフェを運営するという形態に変わった。地域づくり協議会ができたこ

とで、各集落で持っている場所の活用も非常にしやすくなって、風通しが良くなったという話も出ている。

夏やすみ子どもキャンプ

H22から継続している夏の体験プログラム 金沢を中心として小学生が参加
能登島全体をフィールドに、竹の工作に磯遊び・民泊などを体験し、ひとまわり大きくなって
帰って行きました。地域のみなさんの協力で成り立っている大切な事業です。



夏休み子どもキャンプの活動も、地域づくり協議会によって実現した。田んぼや畑、漁師もやって民宿もやっているという農家民宿、漁家民宿が能登島の中には数十軒ある。高齢化にともない、今はやめるところが増えてきている。それでも自然はたくさんあるので、夏休みには海水浴や釣り、キャンプなどをしに家族連れの方がマイカーで金沢・富山方面からも来られる。そこと民宿が連携することで、中京圏からも、修学旅行や自然体験学校の受け入れを始めるようになった。民宿の方だけではなくなかなかこのような体験プログラムを提供できないため、自然体験ガイドのような、安全についても講習を受けて資格を持ったボランティアを養成して、子どもキャンプを運営できるようになった。これが一つの収益源になってきている。キャンプのお手伝いをする人も最初はボランティアだったが、参加費から手当を支払えるようになって、定年退職したお父さんやお母さんたちのいいお小遣い稼ぎになってきていると思う。地域づくり協議会で集った、いろいろな得意技を持つ人が一緒になって取り組み、受入窓口のようなものを作ったことで、こういったことが実現した。

それから、空き保育園を活用して、子どもキャンプで石窯ピザを焼ける窯をみんなで作り、子どもたちが農園に行つて野菜を採ってきて、それを自分でトッピングしてピザを焼いて食べるということも提供できるようになった。

先ほどの観光産業部会が、「のと島クラシカタ研究所」というプロジェクト名の活動をしている。今、僕はここに所属している。観光産業部会というと、観光のためにパンフレットや動画を作り、プロモーションして客をどんどん呼ぶということしか思いつかないが、そうではなく、例えば能登島の伝統的な食文化を都会の方や若い人に伝承する。島ならではの

島をひとつに のと島クラシカタ研究所の取組

- ▶ 地域で活動する若手世代を中心に、能登島の豊かさを受け継ぎ、そして引き継いでいくためのゆるやかな連携を模索しています。
- ▶ みんなで目指すべき方向を共有するために、ロゴとコンセプトパンフレットをつくりました。
- ▶ これからの能登島を担うために、法人化を模索中です。



の農業や漁業、いわゆる生産現場を子どもの時代から食育的に提供していくなど、高いミッションを掲げて活動するために、あえて、のと島クラシカタ研究所とした。「もう一つ、こんな暮らし方があってもいいのではないか」ということを、都会の人たちにわれわれが調査・研究、アーカイブして、それをプログラム化して提供していこうという活動を続けている。

4. まあそい能登島

観光産業部会で幾つかやっているプロジェクトの中で、今、一番取り組んでいるのが「まあそい能登島」という地域のプロモーション活動。

「まあそい」は能登島の方言で、「よく実った」というような意味だが、「うまそうな」「美味しそうな」という意味もあり、能登島はまあそい島なのだとすることで打ち出している。代表的な能登島の風景の写真を3枚選んで、ポスターやWebページなど、販促もののイメージをそれで統一して、島に移り住んできたデザイナーの若い夫婦を起用してそういったものを作っている。

3枚の写真の1枚目は稲刈りの風景。自分たちで稲刈りして新米を食べるという風景が能登島にはある。2枚目は、おじいちゃんがタイを持っている写真。この方は民宿をやっている、自分のところで網もやっているので、捕れたものをそのままお客さまに提供されている。非常に能登島らしい写真だ。3枚目は、2月に撮った、ヨモギ団子の写真。能登島では、春に採ったヨモギをゆでてペースト状にして冷凍しておき、それを2月ごろに解凍して餅つきをして、ヨモギ団子を作って食べるということがよくある。少し早めだが、春を感じられるような風景。また、お餅を作っているおばあちゃんの手しわがいいということで、この写真を選んだ。

「まあそい能登島」という大きいコンセプトの基に、さま

島の体験

島の資源を活用して楽しい体験活動を提供しています。
竹や木・貝殻やシーグラスなどをつかった工作教室、山の整備で薪を活用し
季節の野菜などをトッピングするピザづくりが楽しめます！

のどまの素材で工作体験
つくってあそぼう！

体験 02 里海の素材で
つくろう！
・シーグラスクラフト
・フォトフレームづくり
・漁師の網で工作！ など
体験料 ¥800～
(所要時間 30分程度)

体験 03 里山の素材で
つくろう！
・竹で遊ぼう！
・木で遊ぼう！ など
体験料 ¥800～(所要時間 30分程度)



さまざまな体験プログラムや商品を作っているという取り組みを進めている。40～50代の若手が「ちょっとこういうことをやろう」と言ってお世話をすることで、60～70代の方々も参加してくれて、いろいろなプロジェクトが立ち上がっている。

もう一つは、島の酒プロジェクト。先ほど耕作放棄地が出てくるという話をしたが、減反などもあって使っていない田んぼが結構ある。そこを利用して、農家の方に自分のところで食べたり出荷する米だけではなく、酒米も育ててもらって、収穫した酒米を酒蔵に納入してお酒を造ってもらい、それをまずは島の人たちできちんと飲む。飲むことで農地を守るといような活動を去年から始めた。単に酒米を作るだけではなく、作る過程に都会から若者たちに来てもらい、農業体験をしてもらう「うれし！たのし！島流し！」という取り組みをしている。

実は能登島は加賀藩の流刑地だった。時の殿様に意見具申して煙たがられた老中などは、能登島で蟄居させられていた。能登島にはそういった加賀藩の偉い方をお世話する係をしていた集落が幾つかある。

この歴史を逆手に取り、現代で本来あるべき暮らしから離れた生活をしている都会の人たちを、「その罪を償うために能登島に島流しの刑に処す」ということで募集している。「泥んこだらけになる刑」や、「捕れたての魚しか食べられない刑」など、プログラムを何でも刑という名前にして、作業着として冗談でつなぎを着せて、能登島のわれわれが看守になって、みんなで一緒に米づくりや魚を捕る体験をしたりしてもらっている。先ほどの酒を造るプロジェクトの米づくりも、彼らに体験してもらって、彼らが作った米でお酒ができたので飲みに来てください、買ってくださいということをやっている。これは元々、東京の丸の内にあるさまざまな会社の若手社員が、朝活として、出勤前に自主ゼミのようなことをやっている

が、その中の地域おこしを考えるクラスと提携して、この島流しツアーができています。現在4年目に入り、僕も看守役として毎回参加している。

夏には、向田の祭りといって、高さ約30mのたいまつを作り、そこにみんなで火を放って、海側に倒れたら今年は豊漁、山側に倒れたら今年は豊作という、お祭りがある。火をたいて悪いものを追い払うという意味もある。集落の男たちは1カ月ほど前からこの準備に取り掛かる。切り籠という御神輿状のものも出てくる。これは今はタイヤが付いていてみんなで押すが、本来は肩で担ぐもの。その担ぎ手や押す役の若者などがだんだん減ってきているため、そういうことも、今、島流しの人たちに入ってもらってやっている。

先ほどの自然体験を行う保育園跡は海岸の辺りにあって、ここにコミュニティカフェやクラシカ研究所の事務所などがあるが、サイクリングのツアーの起点にもなっていて、道々、おばあちゃんが畑で何か作っているのを「何を作っているの？」と聞いたりしながらサイクリングツアーをしている。両方が田んぼで、その奥は、片方は山、片方は海という感じ。海の透明度が高くて、アマモが生えているのも分かる。ちなみに、沖に行くと野生のイルカが泳いでいる。そういうものも普通にサイクリングしていると見える。朝早く漁港に行くと、魚の荷揚げをしている漁師の話の聞くなどということもツアー化して、子どもたちの自然体験の中に組み込んだり、普通の夏休みでも、海水浴に来たお客さんでサイクリングする方をガイド付きで案内している。

先ほどのたいまつは、集落に住んでいる方々が皆さん裏山を持っていて、それから集落で持っている共有地の山もあって、そこを年間を通して何度か剪定作業する日があり、そこで出た芝を集めておいてたいまつにして、1年に1度、盛大に燃やす。毎年1軒7束出すというルールがあるが、一人暮らしになったおじいちゃんなどは出せないで、代わりにお隣さんが余分に出したりして助け合っている。この祭りがあることにより、向田の集落周辺の里山はとてもきれいだ。しかし、祭りをやめてしまったら山が荒れてしまう。山が荒れるとキノコが採れなくなる。僕たちのところにはマツタケがよく採れる山があるが、山というのは、人が入るから維持される。里山というのは、まさに人が関わるから維持される自然。祭りで盛大に燃やすために芝を毎年集めるという作業によって、僕たちはキノコなどの恩恵を山からもらっている。そういうことも、だんだん維持できなくなってきたので、ツーリズムの観点で都市から若者に来てもらい、祭りなどを手伝ってもらっている。

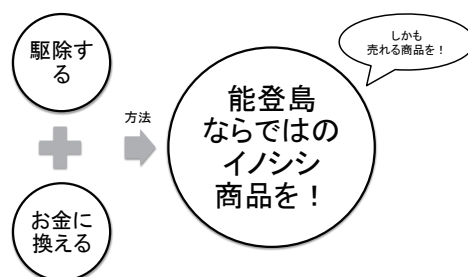
島の酒プロジェクトは、能登島にきた地域おこし協力隊員の男性が、今、事務局をしてくれているが、彼は第1回目の島流しの田植えツアーに参加した人。その方が移住してきてくれた。4年間やって参加者は延べ200人ほどになったが、移住にまで至ったのはまだ1人。彼は島の酒の事務局をやりながら、外国人向けにサイクリングのガイドを提供する会社を起業しようとしている。

ただ、それだけでは冬は稼ぎがなくなってしまうので、僕たちは最近、「まあそい能登島プロジェクト」でもう一つ取り組みを始めた。山がとても豊かだという話をしたが、その山に今、イノシシが増えていて大変困っている。能登島には元々イノシシはいなかった。泳いで海を渡って来た。このイノシシが、畑や田んぼを荒らし、能登島の酒プロジェクトをやっているところにも入ってきている。

イノシシは、わなを仕掛けて捕獲して、止め刺しという電気ショックで命を頂くが、今までは、それを土の中に埋めるという処理しかできなかった。集落の70代のまだ元気なおじいさんでも相当大変な作業で、みんな音を上げていた。そうしたら、能登島で電気屋をやっていた70代の方が、ご自身の倉庫を改造して、イノシシの解体ができる食肉加工場を、許可を取って開設された。捕れて30分以内に肉になるということで、とても新鮮な肉がとれるようになった。きちんと加工して出せば本当に美味しいお肉なので、これを何かに活用できないか、また、それが島に移住して来る人のちょっとした仕事につながらないかということで、今、二つのまあそい揚げというものを開発中だ。一つはイノシシの肉を使ったメンチカツで、もう一つは捕れ過ぎたカタクチイワシなどの魚を使ったつまれ揚げ。能登島には年間40万人の観光客が訪れるが、皆さん大体日帰り、水族館やガラス美術館を見て帰る。そこで、能登島産のお土産を作ろうということで、ファストフード感覚で食べてもらえるものとして、まあそい揚げを作っている。能登島には赤土の台地があり、そこでサツマイモなどを作っていて、これがまたイノシシの好物だが、そういうジャガイモやサツマイモなども中にゴロッと入れてある。

次にやろうとしている商品はベーコン。この方が加工が楽で、冷凍せずに保存が利くので、冬の脂の乗り切ったイノシシを使ったベーコン作りをやっている。こういう取り組みも、クラシカ研究所に集まっているメンバーがいるからこそできているのではないと思う。逆に言えば、僕たちのような40代が面白がってやることを、どんどんやれと応援してくれる先輩方がいるからできていることだと思う。協議会の傘の

イノシシを使った商品開発を！



二つのまあそい揚げ



季節の魚+季節の野菜+手作り味噌



天然イノシシ+赤土野菜

つまれ揚げ

イノシシメンチカツ

中で研究所という活動の場を作り、その中で島の将来のために酒造りをしたり、島流しをやったり、メンチカツを作ったりということを、きちんと会長や役員が認知してくれて、「島の将来のためだ、やれやれ」と言ってくださり、地域づくり協議会を作ってよかったと思う。

一人一人に会って「こんなことをしませんか、できませんか」と言って、やってみて分かったことをみんなで共有して話し合っ、て、「次回はこうしましょう」と言って。やっていることは本当に地味だが、虫の目で、地域の中で自分の力を発揮してくれる方々をうまくまとめ、持続的に活動できるようにしていく。持続的にというのは、人材育成面でもそうだし、お金が回ることもそう。何億円などという巨大プロジェクトを作る必要はないが、少し皆さんが元気になって、お年寄りはいった時間を使って小遣い稼ぎができるという生きがいづくりや、地域おこし協力隊などの30～40代の若い人がメインとなつて月10万円ぐらいのお金が稼げて、他にも自分で農業など五つぐらいの仕事を掛け持ちでやって月20～25万円になるというようなことを、今、能登島でやっている。

5. ワーク・ライフ・バランスとコミュニティワーカー

今は朝5時に起きて、朝ご飯を家族のために作り、お弁当を子どもに持たせて、徒歩2分ぐらいの所にある保育園跡に行つて事務仕事をして、昼間は今度行うツアーについて農家

の方や漁師と話をして、夕方5時ごろに子どもを幼稚園に迎えに行き、妻の方が遅く帰ってくるので晩ご飯を作り、子どもたちを風呂に入れるという生活をしている。給与は役所勤めの頃の半額以下に減ったが、ワーク・ライフ・バランスというか、すごく幸せな暮らしをさせてもらっている。そういう中で、地域社会に役立つことをしている。役所の方ではなかなかここまで細かいことはしないし、やったらいいと思っていても一人一人ではできないことを、人を集めて話し合っ、まずはやってみるというところに立ち合う仕事をさせてもらっている。

かつて能登島には三つの保育所があったが、今はそれが一つに統合された。小学校もかつて三つあったが一つになった。中学校は今から7年ほど前に合併して、橋を渡ったところにある中学校にみんなスクールバスで通っている。小学校は、今、一学年約20名で、全校生徒が約120名。

保育園の子は少し増えてきている。島に帰ってきたりする若者が徐々に増えているのだと思う。七尾市は子育て支援策が割と充実していて、子どくさんの家庭が結構多い。三世代同居、四世代同居の家も増えてきている。これは、七尾市が始めた移住コンシェルジュという取り組みが功を奏しているのではないと思う。単に家探しをするだけではなく、市役所や商工会議所、ハローワークが連携して、移住する人の就職先を見つければいいところまでやっている。

能登島では、民宿の三代目のような感じで30代の若者が帰ってきているし、漁師も若い人に人気の職業になってきている。漁協の漁師の平均年齢は20歳ぐらいで、定置網で寒ブリを捕っている。この間も、東京工業大学の修士課程を出た人が能登島で漁師になった。魚の残渣、いわゆる内臓などを発酵させて醤油を漁協の商品として作れないかという研究をしている。それから、あるタコ漁師は、今まで漁師が勘に頼っていたそれぞれの釣り場を全てデータ化して、日付とその日の気温、風を入れると釣り場の様子が分かるアプリを作った。まだ30代半ばという若さだが、金沢に自分で獲った魚を食べさせる居酒屋もオープンさせた。この間はクルーザーを買って、VIPの人を連れて能登島一周のクルージングと食事ができるツアーをやると言っていた。ここ10年を見れば、僕たちの取り組みの効果がやっとな出てきて、子どもも増えてきたという感じがしている。

限界集落と言うにはまだまだ豊かな島で、もっと厳しい条件のところはたくさんあると思うが、いつかそうなる前に手を打っていく。ああだこうだ議論していてもうまくいかどうか分からないので、取りあえずやってみようの連続。僕は、ソーシャルワーカーならぬコミュニティワーカーをやっていると思っている。コミュニティワーカーをやれる人がたくさん出てきて、知見を交換する場所ができたらと思っている。